れ得ないであらう。と以上の様に論じて居ります

一、香港十七日電

(イ)東京通信　過日大阪等で日本軍用火藥庫等が爆發した事件は現に反戰分子の所作である事査明された。出動の際該火藥庫には川崎砲兵少尉、〇本八平砲兵准尉等數名が居たが十一日捕へられ大阪東區で銃殺が行はれた日本政府は大いに困難を感じ此の事故の對策とし表面貧民が火元であると宣傳し極めて厳視して居る

(ロ)東京某大使館等の消息に依れば東京の現狀は穩かならず反戰が案せられて居る街區には反戰ビラが貼り滿され巡査は捜査に忙殺されて居る將來の兵變發生は秘密裡に運動され反戰に就ては現に公開討論して居る日本陸軍省は責任の爲め陸相の辭職を對應策として居る

内閣情報部三・二〇　情報第二號

重慶日本語放送（十四日）　（關東遞信官署遞信局聽取）

軍事委員會の何應欽氏か「戰術的觀點より見て日本の東亞新秩序建設運動に反駁を加へる」と題して先日中央放送局より放送する處かあつたか、今日は其の放送の大要を紹介する

「日本は蘆溝橋事件の時から我か北支駐屯軍を各個に擊破しようとしたか、其の目的は先づ北支軍から打破り逐次中國を征服せんとしたのであつたか、蔣委員長は之を看破り決然として全國民に激して、長期抗戰の體勢を整へるに至つた、玆に於て日本の即戰、即決の戰法は儚なくも破つて了つた、現在日本軍閥の對支侵略は軍事的にも、經濟的にも不利な情勢に在り、國民の志氣も振はざる等極めて不利となり、結局泥沼に落入つたと同じく最後の運命を待つて餘儀せらるる有様となつた、其の不利な情勢に立到つた時難局打開の方法として昨年十二月二十二日近衛の對支國交調整の聲明があり、之を以て東亞新秩序建設を爲すのであるとして、日本國民は勿論世界各國を僞瞞し中國の分割を企圖したのであつた、然るに之に對し蔣委員長は十二月二十六日近衛聲明か大きな陰謀なることを摘けて完膚なき迄に之を世界に暴露し徹底的にやつつけたのであつた。之が爲に近衛は敗退するの餘儀なくされた、然るに日本は之に懲りず本月四日又しても平沼が東亞新秩序建設運動なる談話を發表した、日本は對支侵略戰の失敗を換

回せんと必死になつて居るのである、私は之を暴露すべく近來に於ける日本軍閥の行動を檢討する、歴史的に日本は世界的秩序を保持せざる國である。傳統的に他民族を征服する意欲を有して居る、數百年前豊臣氏の征韓論があつた、豊臣は韓國政府に送つた書翰中に「お國を經て山を越へ海を渡り中國を征服する」との意味の辭句があつた、之に依つて見ても日本軍閥の侵略行爲は傳統的であることが判る、明治初年に黒船來航の時に明治天皇は米國との和を御提議になられたのであつたが、軍閥は斷乎外敵を打破るべしと高唱した。歐洲戰爭の時日本は其の野心を滿す機會ばかり中國に魔手を延はし遂に二十一箇條問題を起したのであつた、田中義一は中國征服、東亞征服に世界征服なる案を提唱して世界に一大センセーションを捲起した、田中は世界征服するには先づ中國を征服する必要があり、中國を征服するには先づ滿蒙を征服する必要あると言ふのであつた、之に依れば田中は國民の生命財産を犠牲にして世界を征服せんとするものなのである、……（不明）……日本軍閥の作戰計畫に依ると滿支の征服は第一に滿洲を次に黄河以北を、次に揚子江一帶を最後に珠江一帶を征服する段取になつて居るのである、滿洲侵略は之の計畫の第一歩なのであるこの四段階の計畫に在る通り其の實行に付ては或る期間の間隔が必要なのである、第一の滿洲事變の後六ケ年にして盧溝橋事件を爲し得た之れから見ても日本國家は長期戰に堪へざる國家であると言ふことが判るのである、無理にやらうとすれば結局自國の壞滅を促すことになるのである。盧溝橋事件後日本軍閥は元より卽戰卽決主義を以て中國の主力を擊破し遂に全體を滅ぼさんとしたのであつたが、我が中國國力の增大、充實、蔣委員長指導の下に國民全般一致團結に依つて日本の計畫は脆くも破れて了つたのであつた、日本軍閥に致命的大打擊を與へた、それで東亞新秩序建設運動なるものを掲げて中國及び世界を脅そうとし最後の挽回を計らうとしたのであるが、この東亞新秩序建設運動なるものは眞に平和を欲して新秩序の建設を唱へたものではない、元より東亞は安定して居た、平和も保たれて居た、秩序も良かつたのであつたが、日本に依り之が打破られたのである、眞に平和を欲するならば日本軍閥は侵略を止め中國領土内から撤去すべきである、近衞聲明及び平沼談話は世界を偽瞞するものであるが、結局は日本軍の對支侵略を失敗を裏書きするものに外ならぬ」

以上は何應欽氏の放送内容の大要である、日本の諸君も宜しく以上の諸點を認識し軍閥打倒を意識すべきである

（附　記）

昨三月十四日附第四一〇號の四枚目（表紙を含ます）二行目の脱子の箇所には「　愒」なる語を入るるものとす

177

重慶日本語放送（十五日）　（關東遞信官署遞信局聽取）

本月五日及六日日本議會に於ては特別會計、一般會計及國防追加豫算が相次いで提出された之に依り一九三九年に於ける日本の國防豫算なるものが眼前に晒されたのである。我々は今之を諸君と共に檢討することゝしやう、今年度の日本の國防豫算は一見して變だと思はれる點が多々ある、日本は一體中國と戰爭せねばならぬと共にソ聯とも事を構へる準備が必要であり、更に英米との建艦競爭をもやらねばならぬのである、國防豫算の内一般豫算は三十六億九千萬圓であり對支戰豫算は四十六億餘圓である、陸に於てソ聯に對し海に於て英米に對する爲の豫算は僅かに六億七千萬圓に過ぎない、之に臨時軍事費の一部を合せても九億一千萬圓位のものである、之では英米に對抗し得ぬばかりでなく、中國ですら日本を可哀想だと思ふ位なのである、然し日本の豫算は昨年に比して約七億を増加して居り、未曾有の大豫算となつて居り、愈々日本は拔差しならぬ状態となつた

豫算九十六億は實に日本として取れるだけ取り盡した豫算である、今年の豫算として氣の付くのは軍事費が減つたことである、昨年軍事費は全豫算に對し六十四%であつたが今年は六十%で四%と減少したことである、更に一般豫算中に於ても陸海軍事費が昨年に比し陸軍は